

薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告

—一般県道別迫・上下線改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1983

広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	6
IV 遺構と遺物	8
V ま と め	14

例 言

1. 本報告は、昭和57年11月～12月に実施した一般県道別迫・上下線改良事業に伴う薄古第1号・第2号古墳（広島県甲奴郡上下町所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書は梅本健治が執筆・編集した。
4. 遺構の実測・写真撮影は松井和幸・沢元保夫・梅本が、トレースは梅本が各々行った。
5. 薄古第2号古墳第1主体部の石材鑑定は広島大学理学部地質鉱物学教室柴田喜太郎氏に依頼した。
6. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（上下・府中）を使用したものである。

挿 図 目 次

第1図	薄古古墳群周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)	3
第2図	上下町内出土遺物実測図 (1 : 3)	4
第3図	薄古古墳群周辺地形図 (1 : 2,000).....	6
第4図	薄古古墳群地形測量図 (1 : 400).....	8
第5図	薄古第1号・第2号古墳墳丘遺存図 (1 : 200).....	9
第6図	薄古第1号・第2号古墳墳丘断面図 (1 : 80)	10
第7図	薄古第2号古墳第1主体部実測図 (1 : 30)	12
第8図	薄古第2号古墳第2主体部実測図 (1 : 30)	13

図 版 目 次

図版1	a 薄古古墳群遠景 (北より)	
	b 同 上 (西より)	
図版2	a 薄古第1号古墳全景 (調査後, 南より)	
	b 薄古第1号古墳周溝断面 (西より)	
図版3	a 薄古第2号古墳全景 (調査後, 南より)	
	b 薄古第2号古墳周溝断面 (西より)	
図版4	a 薄古第2号古墳第1主体部 (蓋石除去前, 東より)	
	b 同 上 (蓋石除去後, 東より)	
図版5	a 薄古第2号古墳第2主体部 (西より)	
	b 調査区西辺落込み全景 (南より)	

I はじめに

本発掘調査は広島県甲奴郡上下町より世羅郡甲山町に到る一般県道別迫・上下線の道路改良事業に伴うものである。

昭和56年5月、広島県上下土木事務所（以下上下土木）は広島県教育委員会（以下県教委）に、一般県道別迫・上下線道路改良工事予定地内における埋蔵文化財等の有無ならびに取扱いについて照会した。県教委では当該地内の分布調査（昭和56年6月）、ならびに試掘調査（昭和56年9月）を行い、当該地内で古墳2基（薄古第1・2号古墳）を確認した。このため県教委はこの取扱いについて上下土木と協議したが、すでに用地買収は終了しており工期も迫っていることから現状で路線の変更はできないとの結論に達した。このため県教委でこの古墳について事前の発掘調査が必要である旨上下土木に通知した。昭和56年9月、上下土木より薄古第1・2号古墳の発掘調査の依頼が県教委にあった。しかし県教委では日程的にもこれに対応できないことから、広島県土木部より予算の配当替をうけ、この調査を財団法人広島県埋蔵文化財調査センターに委託することとした。

発掘調査は県教委の委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが昭和57年11月8日～12月8日までの1ヶ月間にわたって実施した。調査面積は約200㎡である。

なお、調査にあたっては上下町教育委員会、広島県上下土木事務所及び上下町上下、深江、国留地区の方々にも多大な協力を得た。記して謝意を表する。

II 位置と環境

上下町は広島県中央部のやや東側（旧備後国中央部）に在り、起伏の緩かな標高500～700mの吉備高原面に位置する。町内は西流する上下川（江ノ川水系）と南流する矢多田川（芦田川水系）により大きく二分され、これら河川の流域に谷盆地状の狭小な平野部を形成している。町城の中央西側部に偏している上下町の中心街は、特に近世においては天領代官所が置かれる一方、石州路の宿場町として賑わい、周辺地域の中心地的役割を担っていた。

従来殆んど発掘調査が行われていないこともあって、上下町内の遺跡については必ずしも多くは知られていない。ここではこれまで明らかになっている範囲で時代毎に概観してゆくにとどめる。

縄文時代 唯一、上下町南端に位置する扇原遺跡が知られるのみである。扇原遺跡は、北流する矢多田川谷頭部の狭隘な地に立地し、縄文時代前～後期の土器片を中心に、石楯・磨製石斧・磨石などが採集されている⁽¹⁾。

弥生時代 住居跡を検出した道城遺跡・下郷桑原遺跡以外には当該期の遺跡は殆んど知られていない。道城遺跡は、上下町の中心部に近い独立丘陵の南麓に位置し、道路拡張工事に際して弥生時代後期の住居跡1軒が発見されている⁽²⁾。一方、下郷桑原遺跡は昭和57年に広島県教育委員会により試掘調査が行われ、弥生時代中期の住居跡を検出している。この他では薄古古墳群の位置する尾根の西隣の丘陵の谷部より弥生時代中期と考えられる分銅形土製品が出土している⁽³⁾。

古墳時代 上下町内の古墳の総数は昭和56年3月現在で119基を数える。その大半は径10m内外の円墳で、前方後円墳は南山第1号古墳・古城峠古墳群（2基）など数基存在するにすぎない。次に主要な古墳について略述しよう。

上下町東南部の水永地区に存在する南山第1号古墳は全長24m、後円部径15m、高さ3mの前方後円墳で、奥行8.3mの横穴式石室をもつ⁽⁴⁾。宗兵衛山古墳・上下小学校裏古墳は昭和55・56年に各々広島県教育委員会によって発掘調査されている。両古墳とも内部主体は横穴式石室だが玄室奥側しか残存していない。宗兵衛山古墳からは須恵器（杯蓋・杯身・高杯）と金環1が出土しており、6世紀後半頃の古墳と考えられる。一方、上下小学校裏古墳は、石室背後に周溝がめぐる円墳で、玄室内より須恵器（杯



第1図 薄古古墳群周辺遺跡分布図 (1:50,000)

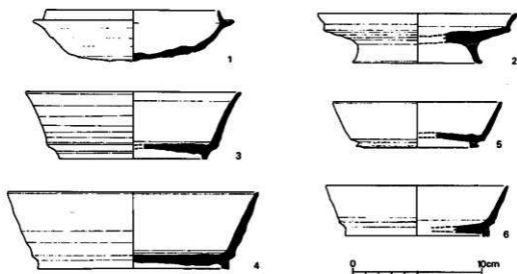
1. 薄古古墳群 2. 浄門寺山古墳群 3. 薄古東古墳群 4. 大仙平古墳群
5. 上高古墳群 6. 上高城跡 7. 国留城跡 8. 上下小学校裏古墳
9. 翁山城跡 10. 道城遺跡 11. 宗兵衛山古墳 12. 有福城跡
13. 下郷桑原遺跡 14. 南山第1号古墳 15. 古城峠古墳群 16. 扇原遺跡
17. 中山古墳群 18. 三須磨古墳群

身)、周溝内より土師器(甕・高杯)が出土している。

なお、第2図1は町内で出土した須恵器杯身で、ほぼ6世紀後半と考えられる。

古代 この時期に属する明確な遺跡は発見されていない。ただ、第2図2～6に図示した須恵器は矢野地区にかけて存在した窯跡から出土したとされる⁽⁶⁾もので、いずれもほぼ7世紀代の所産と思われる。器種としては高台付の皿(2)と高台付の杯があり、後者は器高が高く口径の大きいもの(3、4)と、器高が低く口径の小さなもの(5、6)とに分けられる。

中世 当該期の遺跡については山城跡以外知られていない。山城跡としては県史跡有福城跡、翁山城跡をはじめ、薄古古墳群周辺にも土居型式の上高城跡・国留城跡などが存在する。有福城跡(標高531m)は、京都市賀茂社領有福荘に近接し、60×20mの南北に長い本丸から東北方向と西北方向にのびる尾根に各3段からなる小郭群⁽⁷⁾を配す。城主については、南北朝時代に南朝方の竹内兼幸が在城したあと有福氏が代々居城している。翁山城跡(標高538m)については、上下町の中心街を見下ろす山頂に築かれ、74×16mの東西に長い本丸の東西に各小郭1段を設け、東側はこの小郭の下に



第2図 上下町内出土遺物実測図(1:3)

1. 上下町国留先谷出土(上下町教育委員会保管)
- 2～6. 上下町矢野出土(矢野小学校保管)

さらに石垣により鋤形の郭を配している。⁽⁸⁾鎌倉御家人長谷部信連の子孫が代々在城したと伝えられている。

(注)

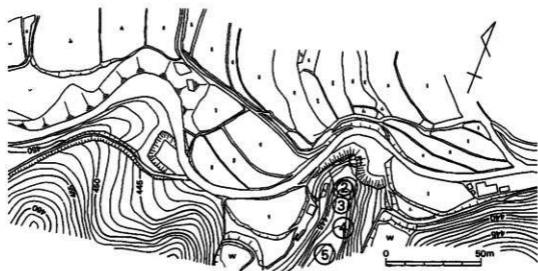
- (1) 服部宜昭・妹尾周三「甲奴郡上下町扇原から発見された縄文時代の遺物について」『芸備』第6集 1978年
服部宜昭・妹尾周三「上下町における縄文・弥生時代の遺物について」『甲奴郡文化財研究』第5巻 1979年
- (2) 服部宜昭「甲奴郡における弥生時代の遺跡と遺物について」『甲奴郡文化財研究』第2巻 1972年
服部宜昭・妹尾周三「上下町における縄文・弥生時代の遺物について」『甲奴郡文化財研究』第5巻 1979年
- (3) 鍛冶益生「甲奴郡上下町出土の分銅形土製品」『ひろしまの遺跡』第7号 1981年
- (4) 上下町教育委員会「上下町の古墳分布」 1981年
- (5) 脇坂光彦「南山1号古墳」『芸備』第10集 1980年
- (6) 妹尾周三氏御教示
- (7)・(8) 西本省三・葛原克人編『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山 新人物往来社 1980年

Ⅲ．調査の概要

古墳群の立地 薄古古墳群は広島県甲奴郡上下町大字深江字上高に所在する、径10m前後の円墳5基で構成される古墳群である。

古墳群の立地する丘陵は、甲奴町との境界をなす主丘陵より東方に派生した支丘陵から低い鞍部を経て更に東南方向にのびる山塊で、一見独立丘陵状を呈する。最高所(標高462m)は丘陵の東に偏っており、ここから西方向に浄円寺山古墳群が立地する尾根が派生する。薄古古墳群はこの尾根から北方に突き出すようにのびる小尾根の先端に相接して築かれた古墳群である。薄古古墳群からの視界は概して北方から北東方に良く開けている。特に、北東方向には西流する上下川流域に上下町で最も広い平野が広がり、薄古古墳群はこの上下川流域の平野から湾入する狭長な水田面を眼下に望む。薄古古墳群の周囲から北方の上下川左岸の諸丘陵にかけては町内でも有数の古墳集中区域で、浄円寺山古墳群(8基以上)・薄古古墳群(8基以上)・大仙平古墳群(3基)・中山古墳群(11基)・三須磨古墳群(8基)などが群在する。

古墳群の構成 古墳群を構成する古墳5基の残存状況については、第1号古墳が半壊、第4号古墳が墳頂部から東側斜面にかけて攪乱坑をあけられているのを除けば、概して良好である。5基の古墳はその立地状況等により大きく3グループに分けることができる。即ち、第Ⅰグループ(第1号古墳)・第Ⅱグループ(第2・3・4号古墳)・



第3図 薄古古墳群周辺地形図(1:2,000)

第Ⅲグループ（第5号古墳）である。第Ⅰグループと第Ⅱグループの距離差5m弱、比高差3m、第Ⅱグループと第Ⅲグループとは距離差2m強、比高差2～3mをはかる。最も良い位置に立地する第Ⅱグループの3基は墳形・墳丘規模等類似し、ほぼ同一標高の尾根中央に相接して築造されている。最も奥に立地する第Ⅲグループの第5号古墳は明瞭な鞍部でなく段差をもって尾根の基部に続いて行く。墳形に関しては円形と考えられるが、前面に1段低い平坦面をもっており、古墳がもう1基存在する可能性がある。内部主体については、第2号古墳で小形の箱式石棺と土壇を検出した以外は不明である。ただ、地元での聞きとり調査によれば、第1号古墳と第4号古墳は箱式石棺であった可能性がある。

調査の概要 調査の対象となったのは、尾根の先端側に立地する第1号古墳と第2号古墳の計2基である。調査方法は、各古墳の墳頂部中央に任意に基準杭を設定し、この2本の基準杭を中心に東西南北に十字の土層観察用の畦（幅50cm）を残して、表土の全面的除去を行った。しかし、ごくうすい表土層の下には平均15～20cm、最も厚い第2号古墳墳頂部では40cmもの厚さで黄褐色粘質土が堆積していたために、第1号、第2号古墳とも墳端部を検出できなかった。そこで、土層観察用の畦に沿って東西南北に幅50cmのサブ・トレンチを入れて上記黄褐色粘質土層を除去したところ、周溝と共にかなり急角度の段差をもつ墳丘斜面を検出して、墳端部を明らかにすることができた。

第1・2号古墳とも背後に地山を掘込んだ周溝をもつ円墳で、第1号古墳は径6.5m以上、第2号古墳は7.7m×7mの南北にやや長い円形を呈する。内部主体については、第1号古墳では検出できなかった。第2号古墳では、墳頂部ほぼ中央で長方形の土壇（第2号主体部）、墳頂部西北隅に偏った位置で小形の箱式石棺（第1号主体部）を各々検出した。両主体部ともほぼ北々東-南々西の方向に主軸をもっている。第2号古墳第2主体部に伴って土師器細片が出土した以外は、遺物の出土はなかった。

その他、調査区西辺の急斜面において、北々東-南々西の方向に走る溝状ないしは段状の落込み2～3条を検出した。性格等は不明である。

IV. 遺構と遺物

1. 第1号古墳

調査前の状況 (第4図)

第1号古墳は尾根の最先端に位置し、崖面に接するため東側と北側を中心にすでに

墳丘の大半を失っていた。墳頂部の標高は446m弱で、平野部との比高差約25mである。調査前の状況では、第2号古墳墳頂部から20°の急角度で続く斜面の先に5×4m程度のごく狭い平坦面が認められた程度で、古墳の存在が危ぶまれた。

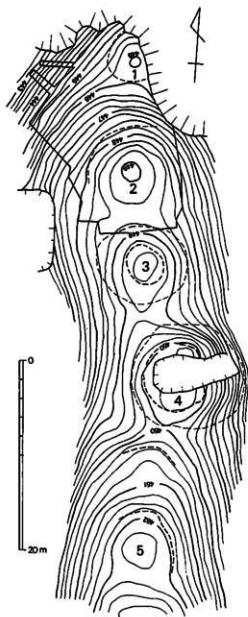
墳丘 (第5・6図, 図版2a)

墳丘の大半を既に失うが、径6.5m以上の円墳と考えられる。現存部分の墳丘高は、0.6~0.8mで、墳丘の背後には周溝がめぐる。墳丘は地山面(安山岩系統の角礫からなる岩盤)をある程度削平して平坦面をつくり、その上に3枚以上の盛土を施している。盛土の厚さは10~20cmである。

周溝 (第5・6図, 図版2b)

墳丘背後をめぐる周溝は、上端幅0.9~1.3m, 下端幅0.2~0.6m, 深さ約0.3mの規模をもつ。第2号古墳から続く急斜面を利用しており、地山への掘込みの度合いは比較的少ないと考えられる。溝内の埋土は3~4層に分かれ、溝底には砂礫を多く含む淡灰黒色土が堆積する。

内部主体



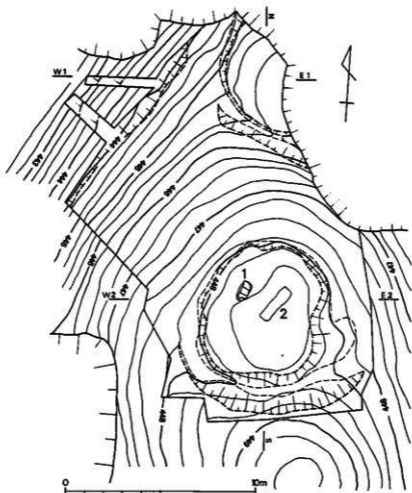
第4図 薄古墳群地形測量図 (1:400)

当初、地山直上の淡灰黒色土の広がりを中心部かと考えたが、墳丘の盛土であることを確認した。ただ、既述の如く伝聞によれば箱式石棺が存在した可能性がある。

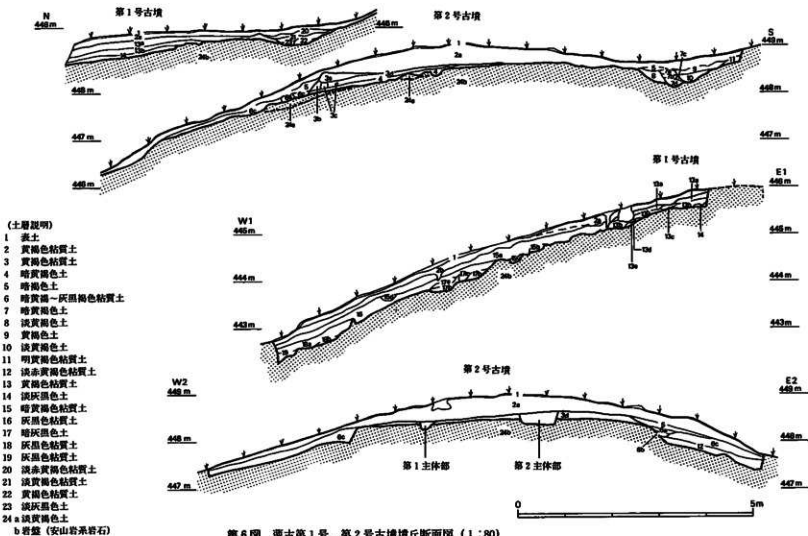
2. 第2号古墳

調査前の状況（第4図）

第2号古墳は第1号古墳の南5m弱の距離に位置する。墳頂部の標高448.5m強で、第1号古墳墳頂部との比高差3m弱、当古墳群中最良の位置を占める。調査前の状況では、南接する第3号古墳との間に明瞭な鞍部が存在し、明らかに円墳であることを識別できた。ただ、墳丘の東側から北側の斜面では、特に墳端部の識別が困難で墳端が尾根の斜面にそのまま続くために、墳丘規模については実際以上に大きく考えられ



第5図 薄古第1号、第2号古墳墳丘遺存図（1:200）



第6圖 薄古第1号, 第2号古墳墳丘断面図 (1:80)

た。

墳丘（第5・6図，図版3a）

南北7.7m×東西7mの南北にやや長い不整な円墳で，墳丘背後には第1号古墳同様の周溝がめぐる。墳丘の高さは周溝の溝底からおよそ1.3m，東西両裾から約0.8mである。墳頂には南北7m×東西6mのかなり広い平坦面が広がり，断面台形に近い。墳丘は基本的には地山を円形台状に削出し，この土台の上に墳丘北半を中心に1～3枚の盛土を施している。盛土の厚さは最も厚い個所で50cm認められた。

周溝（第5・6図，図版3b）

周溝は上端幅1.5～1.8m，下端幅0.1～1.2m，深さ約0.4mの規模をもつ。地山への掘込みの度合いは比較的深い。溝内の埋土は基本的に4～5層に分けられる。いずれも暗黄褐色土だが，溝底の堆積層はやや黒味がつよく，砂礫を多く含む。この上の黄褐色土層はこれら第2号古墳の周溝埋土を切っており，南接する第3号古墳の周溝埋土と考えられる。ところで，周溝は墳丘背後の西南～南～東南の範囲に弧状に認められ，それ以外の墳端部では溝状の掘込みは一切みられない。ただ，西側墳端部の一部を除いて，墳丘下端部から幅60cm程度，厚さ10～20cmの暗黄褐色～灰黒褐色粘質土の堆積が墳丘をめぐるのが認められる。

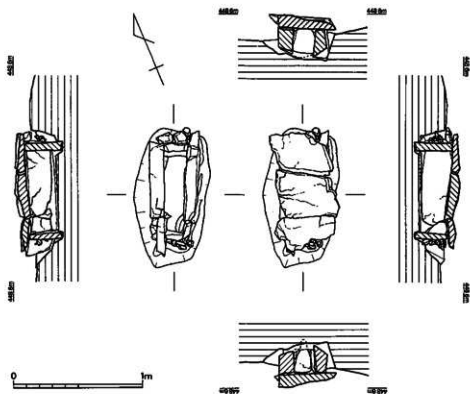
内部主体

墳頂部中央で第2主体部（土壇），北西隅に偏した位置で第1主体部（小形箱式石棺）を各々検出した。両主体部とも盛土層上面から掘込まれており，その底面は第1主体部の方がやや低い。両主体部はほぼ並行して営まれており，長軸はほぼ北々東～南南西の方向にある。

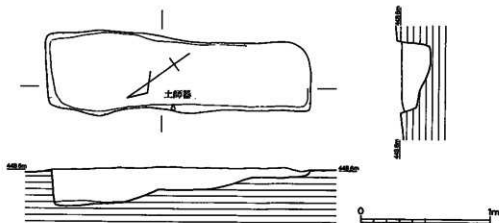
a. 第1主体部（第7図，図版4a・4b）

第1主体部は墳頂部北西隅に偏した位置に営まれた小形の箱式石棺である。石棺は1.09m×0.55mの隅丸長方形の墓壇内に構築されており，その長軸はN23°Eの方位を示し尾根の主軸にほぼ平行する。石棺の規模は内法で長さ61cm，南端幅13cm，北端幅18cm，深さ23～25cmである。蓋石は長さ47～50cm，幅27～38cm，厚さ6～8cmの長方形の板石3枚を隙間なく構築している。蓋石の間や周縁に小角礫・粘土などによる目張りはみられない。側石は東西両側石として2枚ずつ板石を用いている。両側石とも一様に北側に厚手で大形の板石を，南側に小形で薄手の板石を用いている。前者の規

横は長さ60~70cm, 幅20~26cm, 厚さ10~12cmをはかり, 横長に置く。後者は長さ22~31cm, 幅12~20cm, 厚さ4~7cmの規模をもち, 東側石では縦長に西側石は横長に置いている。南北両小口石は長さ27~29cm, 幅14~19cm, 厚さ5~7cmの規模をもち, 薄手で小形の板石を縦長に用いている。側石・小口石は平面的には小口石を両側石が挟みこむような組方がなされており, しかも東側石北端と西側石南端は極度に小口部からとびだしている。次に側石・小口石の構築順序を述べれば, 先ず墓壇底の両端部を5cm程度掘凹めて両小口石を垂直に立てる。次いで, 墓壇底面の東西の壁際をわずかに削平して平坦面をつくり, その上に両側石を置き, 側石で両小口石を挟みこんで小口石の安定をはかる(東側石南端の板石については墓壇底面への掘込みが認められる。また, 北側の両側石に関しては明らかに大形の側石の重量による小口石の固定がみられる)。最後に, 両小口石および西側石南端の板石と墓壇壁の間に12cm以下の小角礫を詰めこんで裏込めし板石の安定をはかる。石棺の頭位については, 床面がやや高く空間がやや広く, 側石に大形の板石を用いている北側と考えることができ



第7図 薄古第2号古墳第1主体部実測図(1:30)



第8図 薄古第2号古墳第2主体部実測図 (1:30)

ようか。棺材については花崗斑岩という分析結果を得た。

b. 第2主体部 (第8図, 図版5a)

第2主体部は墳頂部ほぼ中央に位置する, 長方形の土坑である。長軸の方位は, N 36° Eである。規模は長さ205cm, 幅55~67cm, 深さ5~28cmを測る。西側壁上面で土師器細片が出土しているが, 器形・時期は不明である。

3. 調査区西辺の落込み (第5図, 図版5b)

第2号古墳墳頂部から4m低位の調査区西辺の急斜面において, 北々東-南々西の方向に走る溝状の落込み2条を検出した。2条のうち高位のものは, 幅1.6m前後, 深さ0.15~0.2m, 長さ10m以上の浅い溝状を呈する。埋土は灰黒色系のシルト質のものである。

以上の落込みに関しては類例に乏しく, 性格不明と言わざるをえない。

V. ま と め

今回調査を行った薄古第1・2号古墳はいずれも出土遺物はほとんどなく、その築造年代を明確にすることは困難である。ただ、背後に周溝がめぐる低い墳丘をもつという点から言えば両古墳とも築造年代にそれ程隔たりはないものと考えられる。更に、立地面から言えば、古墳群の中でも最良の位置に築造されている第2号古墳の方が第1号古墳に先行するかと思われる。

次に、第2号古墳の第1主体部である小形箱式石棺の構築法を検討することによって、ごく大雑把な築造年代を与えたい。箱式石棺を内部主体とする小規模古墳の多くは遺物をもたないか、鉄刀子、鉄鏃などを少量出土するのが通常で、多くの場合古墳築造の時期決定は非常に困難である。僅かに、古墳の立地・古墳群の構成状況や板石の用い方などを比較検討することにより、おおまかな年代が与えられている場合が普通であろう。薄古第2号古墳第1主体部の場合、基本的に側石は板石を横長に用い、小口石は板石を縦長に用いている。石棺を組むに際しては、両小口石は墓壇底面を5cmほど掘り込んでその中に板石を立てるのに対し、側石は基本的に墓壇底面を掘り定めることなく、僅かにその壁際を削平してできた平坦面に板石を立て置く、といった石棺構築上の特徴を指摘しよう。このような特徴をもつ箱式石棺の類例をしいて求めるならば、石棺規模に大きな差違はあるが、福山市・才谷第2号古墳A主体(内法長143cm)、同・才谷第3号古墳B主体(内法長162cm)、同・手坊谷第2号古墳(長180cm)、同・手坊谷第7号古墳(長170cm)などをあげることができよう。これらのうち、手坊谷第2号古墳の墓壇内より鉋・ノミなど鉄器6点、周溝底などから埴輪片(円筒埴輪ほか)、須恵器(有蓋高杯)が各々出土しており、6世紀前半でも初頭に近い時期を古墳築造年代として捉えることができる。以上により、手坊谷第2号古墳主体の箱式石棺と構造・構築法の点で類似する薄古第2号古墳第1主体部の構築時期として6世紀初頭を前後するごくおおまかな時期を考えておきたい。

(注) 広島県教育委員会「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」1976年



a. 薄古古墳群遠景 (北より)



b. 同 上 (西より)



a. 薄古第1号古墳全景（調査後、南より）



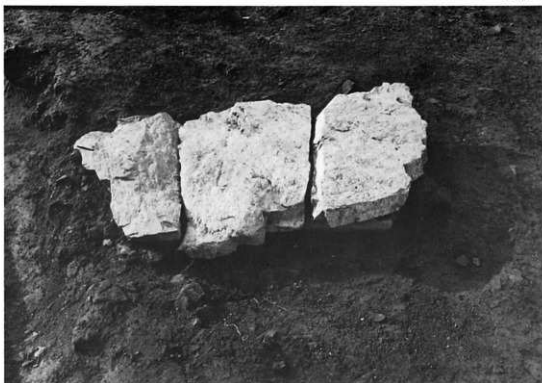
b. 薄古第1号古墳周溝断面（西より）



a. 薄古第2号古墳全景（調査後，南より）



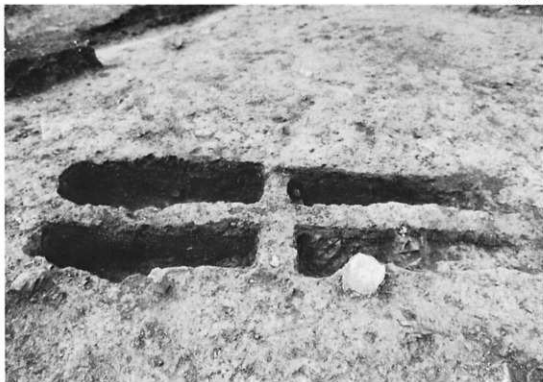
b. 薄古第2号古墳周溝断面（西より）



a. 薄古第2号古墳第1主体部（蓋石除去前，東より）



b. 薄古第2号古墳第1主体部（蓋石除去後，東より）



a. 薄古第2号古墳第2主体部(西より)



b. 調査区西辺落込み全景(雨より)

薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告

昭和58年3月

編 集	岡山県埋蔵文化財調査センター
発 行	岡山県教育委員会 岡山県埋蔵文化財調査センター
印 刷	文化印刷